墨蹟十萬の中で只つた一枚――古稀加六翁を二つ書く――喧しい默言つて見とれない――合せて百五十二歳――大隈の百二十五歳説――約束が違つても追駈ける者は――衲のは理窟でも何んでもない――我が這裡には生死はない

墨蹟十萬からの中で、衲が百五十二歳と書いたのは只つた一枚ぢや。それは如何した譯かと云へば、山田の老婆が絹本の大額を衲に書けと云ふぢや。例に依つて一氣呵成に書いたは好いが、どう云ふ機勢かサ、「古稀加六翁」・「古稀加六翁」と、二つ書いたぢや。サ――是りや一大事ぢや。絹を求めにやならぬ、書替へにやならぬと、副司寮は絹代の辨償に閉口してブツ〳〵云ふぢや。衲は、

「コラ〳〵喧しい、だまつて見とれ。」

と云ふて、初めの「古稀加六翁」の下へ「又」と云ふ字を入れてサ、次ぎの「古稀加六翁」の下へ「合て百五十二歳、南天棒鄧州」とした。是れでヤツト此の絹も墨も助かつた。實にハヤ命冥加な奴ぢや。

大隈はサ、人間は百二十五歳までは生き得る筈ぢやと云ふて、平素百二十五歳説を唱へてゐるが中々甘い言を云ふたものぢや。若し百二十五にならんで死んでも、貴樣約束が違ふぞと云ふて

閻魔の廳まで追駈けて行く者はない。又た生きればそれだけ徳ぢや。おしやべりで評判を取つてをる男だけに、云ふこととがうまい。

併し衲は理窟でも何んでもない。自然に百五十二歳と書かなくては、殺生戒を犯すことになるから書いたのぢや。此の名詮自稱で衲は百五十二の壽を保つぞ。ハヽア百五十二處ぢやない、我が這裡には生死は無い、無量歳ぢや。何んと書いても差支へはないわい。

一五八　乃木大將和韻の草稿

一年間の頌偈――妙あり不妙あり――語録には一千餘頌――明治三十六年元旦の頌――大將の和韻――草稿を玉木さんから――南天棒の雄大――いつでも南天棒――衲は年始から初めて、一年間に頌偈をやること幾許かサ。中には妙あり不妙ありぢや。先づ元旦は云ふ迄もない、普通でも二月十五日の涅槃忌サ、四月八日の誕生會サ、雨安居の開講に講了、十月の達磨忌、それから雪安居の開講、臘月八日の成道忌に講了、其の他、開山忌、先住忌、一々に語録にあるがサ、實に其の數一千餘頌ぢや。

明治三十六年の元旦の頌を乃木大將に贈つたとがあつた。其の時大將が和韻して贈つてくれた

が、誰れか惡い奴があつて、それを盜んで仕舞ふたぢや。處が不思議にも今度、玉木さんから、大將が和韻の草稿が見付つたからと云ふて送つて寄した。それは衲の送つた祝偈の端に、大將が記したものぢや。衲が送つた偈は、「發卯歲且祝偈」として、

「斗柄轉回す六十五、聖恩恙無く海清新たなり。愛す斯の三尺南天棒、打出す森羅萬象の春。」

と云ふぢや。其の奉書紙の端に、大將は斯う書いて居る。

「南天棒の雄大、意氣年と與に新たなり。打出するは果して何物ぞ、海清寺裡の春。」

と。是れに玉木さんが更に手紙を附してサ、

此の書乃木大將遺物中發見、紀念の爲め南天棒老師に贈呈す。

大正三年二月五日　　玉木正之花押

衲の偈には、何時でも屹度南天棒が入つて居る。南天棒と衲、衲と南天棒、二不二ぢや、偈を見て南天棒を見る。乃木さんは此の歲にはトックに南天棒を透過して居つたぞ。

一五九　チヤンと用意が出來てるよ

「疎山の壽塔」――南天の壽塔は檢定の固り――藤田自徹居士の寄進――「此の中に風露の香有り」――入定も爲人出定も爲人――衲と生死を共にし得るか――棺は瓶――肉身も不變に――藤齋幾太の骨折――周圍八尺高さ五尺――釜から新に造る――「這裏より入る」――木像は横山天然居士の執刀――自分が自分に經を讀むに詐があるか

「疎山の壽塔」は八難透の一つぢやが、南天の壽塔は檢定法の固りぢや。疎山は弟子等が壽塔を造つたので其の手間賃を問ふて喧しい問題を引起しサ、天下の衲僧の頭痛鉢卷の種となつた。併し、南天棒の壽塔は衲の印可居士藤田自徹が造つて呉れて、頗る無事ぢや。壽塔は花崗石で出來てをる。地下に空棺となつてをるから、衲が百年の後には壽塔の横の方からズツと押込めば好いぢや。石の蓋には、

「此の中に風露の香有り。」

と書いた。塔の周圍には南天が幾株となく植えてある。

衲は此の塔下に入定するぢや。直にも遣りたいが、今は國法が許さぬ。國法を犯してまで定に入らずとも、大千世界に入つて活潑々地に爲人ぢや。定に入るも爲人、定を出づるも爲人、爲人の外はないぢや。南天棒と生死を共にすると云ふ奴があるが、眞に衲と生死を共にし得るかサ。衲の壽塔をも知らぬ奴、衲の入定をも知らぬ奴は、衲の生死は知らぬ。「生死有り」と云ふ小見地

から南天棒を見やうものなら、遠うして遠し、「雲劍客を遮る三千里」ぢや。サー疎山の壽塔と南天の壽塔と、同か別かサ。

ソコデ棺ぢやが、棺は瓶ぢや。衲は火葬はせぬ。肉身も不變に、宗匠等を檢定して、相似禪を鏖殺するのが衲の願心ぢや。ソレデ燒きはせぬ。四大分離の曉は、瓶に入れて壽塔の下へ押込めば夫れで好い。手數は掛けぬ。衲の入る瓶もモウ出來てる。それは久參居士の齋藤幾太が五百餘金を投じて造つてくれたものぢや。周圍が八尺、高さが五尺ぢやから、中に坐つても樂々ぢや。

瓶の横腹には南天棒を引つ張つて、

「道ひ得るも南天棒矣、道ひ得ざるも南夫棒。這箇の南天棒兮、是れ生か是れ死か。」

と。又た其の瓶の蓋には

「是れ千年の桃核。」

と大書して置いた。又た更に一圓相を畫いて、

「這裏より入る。」

と書してサ、其の外側は楠の厚さ二寸の一枚板で椁を造つてあるから、イザと云へば何時でも間に合ふぢや。禪堂にチヤンと据えてある。化を他方に遷す場合は、サツサと這裏より入るぞ。

此の瓶は餘り大きくて燒く竈がないので。竈から新に造つた。さうしてサ、此の技師が又た田舍にはないので、態々京都から呼び寄せて燒かせたが、中々苦心ぢやつたさうな。ソレデ瓶は四つ造つて、一つは藤田の邸、一つは齋藤の自宅、一つは海清寺、今ま一つは破損した時の用意に工場に保存してある。

それから木像と位牌ぢやが、衲の木像は八幡にも大梅にもあるがサ、海清寺にも中興として木像がなくてはならぬと云ふので、横山天然居士が刀を執つて彫刻し、彩色は三寶堂でやつた。此の資助も藤田自徹居士ぢやつた。中々大きなものぢや。

釋迦は毘首羯磨の作の自像を拜したと云ふ。衲も南天棒の自像の開眼を自分でやつた。其の時の偈は斯うぢや。

「咄咄是れ斯の嚴壽像。天然の妙手眞より鮮かなり。諸方好し鷄鳴の策有りとも、南天棒下の禪を許さず。」

と。妙なものぢやぞ、やつてみるが好い。又た支那の瑞巖和尚は、自ら、

「主人公。」

と呼んで、自ら、

「ハーイ。」

と答へたさうぢや。今は南天棒は南天棒に向つて偈を唱へて回向する。是れが眞の回向ぢや、欺かざる回向ぢや。人は他人に向つて經を讀み、線香を捧げるから、其の中に詐が出來る。自己が自己に向つて經を讀むに詐があるか。サー高く眼を着けて看よ。無論位牌もある。何も彼もチヤンと用意が出來てるよ。此土の衆生の接化が濟み次第、他土の衆生を化度するぢや。

一六〇　正受老人に逢ふてやつた

白隱を打出——無難が得度の徒弟——飯山に庵を結んで居士となる——日本ぢや此の正受——正受のあつたは優曇華——禪師號の追贈——我法難思——正受の心宗傳不傳——正受老人を追慕して亂りに自點狂になるな

飯山の正受老人は白隱を打出して、佛祖の正宗を取留めた禪界中興の祖ぢや。正受は元と無難禪師が得度の徒ぢやが、印可の後も本師の師席を續がず、鄕里の飯山に庵を結んで、居士となつて居つたぢや。居士でも偉いぞ。支那にも龐居士なぞと云ふ人がある。專門の坊サンでも寄つても付かぬ人が澤山あつたが、マヤ日本ぢや此の正受ぢや。それに禪の命脈が正に絕えなんとする時ぢやつたから、實にハヤ正受のあつたは、優曇華とも謂つ可しぢや。白隱も正師を見出して嬉

しかつたらうが、正受も亦た白隱を打出して、さぞ嬉しかつたらう。後に正受老人には道鏡慧端禪師と云ふ禪師號の追贈があつた。報恩底ぢや。今時の居士の中に、禪師號を追贈さるべき者有りや無や。

此の居士の正受に逢ふ爲め、南天下の居士と大姉とを連れて飯山へ行つて、報恩接心をやつたぢや。慧端禪師も定めて滿足ぢやつたらうサ、我法難思〳〵と思ふて居つた難思の居士三千人を接得した衲が往つたぢや。其の時衲が一瓣の香を拈じて云ふたのに、

「妙相圓明にして那邊にか在る、南天今日蒼天と哭す。十月小春山錦に似たり、正受の心宗傳不傳、別別燈下に爪を截らず。」

と。是れは大正三年の五月ぢや。十九日の朝六時四十分に上野を立つてサ、午後三時に豐野へ着いて、それから馬車ぢや。飯山へ着いたのは六時三十分。正受庵に入ると直に接心ぢや。續いて三日三夜の報恩大接心をやつて下山したぢや。是れ迄正受庵に拜塔に來たものも澤山あるが、居士大姉と共に接心をしたのは衲ばかりぢや。報恩は眞恩を報ずるに限る、虛禮の爲めなら參拜せぬが好いぞ。併し居士等は正受老人を追慕したからとて、亂りに自點胸になつてはならぬ。そ

れでは南天の子孫ぢやないぞ。

一六一　遊ぶ間のない處に安樂がある

佛祖の遺囑通り――呑氣に暮らせると思ふは間違ひ――生死の外に立つて居るから――東西に遊化する行履――水野正巳が考案の日割――大正四年五月の日割表

衲は是れ、佛祖の遺囑通りやつて居る。此の歳まで七十七年間、一日も寧日はない。世の人は能く、禪をやると世を遠去つて、山にでも入つて呑氣に暮せると思ふが、それは大いなる間違ひぢや。衆生濟度と云ふ大責任を持つて居る坊主は遊ぶ隙はない。其の遊ぶ間のない處に、人の知らぬ安樂があるぢや。どうしてそれが出來るかと云ふと、生死の外に立つて居るからぢや。

衲が日常東西に遊化する行履を云ふてみればサ、此の日割ぢや。此の表は居士の水野正巳が衲に隨行して歩いた時、矢つ張り時間を大切にするので、其の時〳〵に書入れられるやうに考案して造つたものぢや。是れは何時も前の月に取極めて各處に配り、當月は其の通りにやつて行く。大正四年五月中の日割は斯うぢや。（○は禪會、□は法要、△は道中。）

△五月一日　神戸達磨會より西の宮へ歸山。

留守中諸方から依頼の揮毫を了した。揮毫は筆法や巧拙を顧みないから至つて早い。一分間

に一枚は書く、一時間に六十枚は何んでもない。それから雲衲を集めて垂誡普說した。獨參は時を嫌はずやる。

□二日　西の宮入制接心。故吉田新藏居士の埋葬式に臨む。

○三日　西の宮巨鼇會。提唱入室深夜に至る。

○四日　接了。

何人が、何時何時でも入室すると云へば、何時でも聽くのが南天棒一流の家風ぢや。生死事大、無常迅速ぢや、時處を擇ぶべき筈はない。

△五日　西の宮より名古屋擔雪會行。途中京都聖護院へ立寄る。

○六、七、八日　擔雪會。

居士大姉入室、喚鐘絕間がない。睡眠時間は三四時間とする。

△九日　午後八時、名古屋より東京行。

辨當は精進、小瓢に酒三合、切符は赤。夜行の好いのは坐眠が出來るからよ。

○十、十一、十二、十三、十四、十五日　雪山會。

會では一番大きい。毎日百人餘りの集りぢやから、入室を全般に行渡らせるには骨ぢや。中

食を喰ふ間もない位ぢや。衲は入室を聽くのが飲よりも好きぢやから、飯位は如何でも好い。

○十六日　雪山會接了。提唱。

提唱は一日限りぢや。此の日衲の七十七の祝賀會を開いてくれた。衲の誕生は舊暦の四月四日ぢや。十六日は舊四月三日ぢやが、一日繰上げて此の日に祝筵を開いたのぢや。百五十人ばかり集つて盛會ぢやつた。

□十七日　東京法要。

○十八日　瑞光會。

道林寺の例會ぢや。入室を聽く。

△十九日　正受老人二百遠年諱に應招。東京より信州飯山行。

○二十、廿一日　正受庵、接心及び提唱。

此の間に揮毫數百枚した。

△廿二日　飯山分散。神戸行。

廿三日　午後七時神戸へ着くと直に達磨會ぢや。

一六二　醫者が歸れば蒲團から出る

風邪の神のお見舞――熱があつても午前三時に起床――いつの間にか法戰場中の人――醫者の來た時は蒲團の中――八十迄はお斷りぢや――一月の半分は蒲團に寢ぬ――富士を見たことがない――佛光國師の詩――ものは一徹に進むべし――南天棒の爪の垢でも呑め

飯山は寒かつた。ソレデ汽車中の坐睡で風邪の神が見舞ふたのか知らぬ。何んだか身體の具合が變ぢや。風邪位は何んともない、別に驚きもせぬが、醫者等が騒ぐぢや。三十九度の熱があると云ふたが、十一時まで蒲團を被りながら參禪を聽いた。さうして午前三時にやチャンと起きたよ。一時間は誦經ぢや。それから諸方から來て居る手紙の返事ぢや。朝も未だ熱があると醫者ッ坊が喧しく云ふが、衲は何んのこともない。併し折角心配してくれるから、醫者の來てをる間だけは蒲團の中ぢやが、醫者が歸れば蒲團を出て入室を聽くぢや。併し如何も咽喉が痛いので、マァ醫者の云ふなりに任せて置いた。今度は一寸閉口したなァ。それでも入室は一日一時間も休まなかつたよ。閻魔も迎の使を寄したかつたらうが、衲は八十まではお斷りぢやわい。

それから廿三日後の日割を云へばサ、

○廿三、廿四、廿五日　神戸達磨會。

接了の日、「無門關」の提唱で熱が何處へやら宿替をした。骨折つてやれば病魔も逃げ出す。蒲團にむぐつてをつたら、いつまでも熱魔は退去せぬ。此の日、接了すると直に大阪へ行つた。

○廿六、廿七、廿八、廿九、三十日　大阪長風會。

□三十日　西の宮歸山。

一寸海清寺へ歸つて西の宮の入室を聽いた。

△三十一日　西の宮より東京行。

こんな日取でやつても、尾張の半田（微笑會）や、岐阜（無門會）へ行く間がない。それに伊勢（萬年會）ぢや、丹波（禪風會）ぢやと、イヤハヤ寸時も閑暇がないぢや。

此の日割を見れば分るが、衲は遠方行きは大抵夜行ぢや。汽車の中を寢處と極めて居る。一月の半分は、蒲團の中で横に寢ると云ふことがない。ぢやから白隱が、

お富士さん霞の衣を脱がしやんせ
雪の肌が見とござる

と詠んだ其の富士を見たことがない。佛光國師は二十一遍も京都へ往復されたが、一度も富士の姿を見ぬと云ふ詩があるがサ、衲も是れまでには東海道の往復を三百七八十回もするが、いつもお富士山には御無沙汰ぢや。佛光國師も偉かつたが、富士の話ぢや國師にも負けぬよ。ものは一徹に進むべしぢや。所謂鯀直ぢや。東京へ行く段には東京ぢや、飯山へ行く段には飯山ぢや。少しも横眼を振らぬぞ。

衲も是れ、七十七ぢや。若い坊サン達は少しでも衲の眞似をするが好い。毎日グズツカ〳〵して居らんで、大久保彦左衞門ぢやないがサ、此の南天棒の爪の垢でも煎じて飲め。

一六三　入定前の禪堂巡り先づ京都から

最早八十入定の第一期――開山の五百遠年忌――大分不陰德をした埋合せに――自分で國中を巡り――全國の僧堂から五人づゝ拜請――足並の揃つた處と亂れた處――坊主の臭がなくなる――七十年來坊主を嗅ぎ付けた――是れも同穴

衲も安政六年に八幡に誓詞の松を植えて以來、最早八十入定の第一期が迫つて來た。それと一處にやると云ふので、開山無因禪師の五百年の法要も延してあつたが、愈々諸堂の修繕、再建、其の他一切のことを會下の者に命じたから、サー是れから、若い時に南天棒を提げて諸國の道場

を叩き巡り、大分不陰德をした埋合せにサ、末後の大會には自分で全國の公認僧堂を巡り、親しく天下の龍象を五人宛拜請せんとの志願を果さんものと、總ての準備を整へて、先づ京都附近を第一着に廻つた。

山城で衲が一番緣の深い八幡圓福寺と京都の建仁寺、それに隣單の神戸の祥福寺とは、總員を拜請することにして、圓福へも建仁へも祥福へも登つた。それから京都では、妙心寺の天授僧堂、大德寺、天龍寺、相國寺、東福寺、南禪寺と廻つた。それは大正六年八月のことぢや。是等は平素往復してをるので取纏つたこともないが、足並の揃つた處と亂れた處とがある。只だ特に感じたのは、雲水が麻の衣を着て居たのが少くなつたのと、取次の坊主等が妙な臭になつたことぢや。坊主には坊主臭い處があるものぢやが、どうも坊主の臭がなくなつたやうぢや。サー坊主の臭とはどんな臭かと云つても、そりや說明が出來ぬが、七十年來坊主を嗅ぎ付けた衲には直に分る。衲が五十年前の僧堂入りの頃には、こんな臭はせなんだぢや。伴僧に聞くと、

「近頃は衞生がやかましいからでせう。」

と吐したが、是れもハヤ同穴ぢや、仲間には洩れぬ、異士ゐ見ずかサ。

一六四　師家大衆引ツ括めて婆子一人

堺の南宗寺——龍興山の茶室で有名——何んとなく古人の風がある——由良の興國寺——驚く勿れ法堂の軒には麥が一杯——玄關は寂として聲無し——臺處の婆子——五人の人も賴めぬ——龍潭の婆子か臺山の婆子なら

堺には南宗寺と云ふがあつて、矢ッ張り僧堂がある。龍興山と云ふ茶室で有名な寺ぢや。三好修理太夫の開基で大林の開山ぢや。中興は澤庵和尙がやつた。當代の玄秀和尙に相見してサ、五名の選拔きの雲衲を賴んだ。和尙も元氣好く、ウンと承知してくれた。茶室も拜見した。先住の蜻州和尙は中風ぢやが、健在ぢやつたから逢ふた。此寺の雲衲は再建時代ぢやから多忙らしかつたが、何んとなく古人の風があるのは賴母しいと思ふたよ。

それから由良の興國寺へ行つた。處が驚く勿れサ、法堂の軒には麥が一杯ぢや。雲衲の作務、大難々々かサ。ソコデ玄關に訪ふても、寂として聲無しぢや。臺處の方へ行くと、婆子が竈の前に居つて、

「何用で御座らしやつた。」

と聞くから、今度は此方から

「此の寺の和尚は誰れか、坊サマはをらぬのか。」

と聞くとサ、

「和尚さんは田邊の海藏寺に行つて居るとのことぢや。」

と云ふ。便りない婆さんぢや。委細を言傳けて置いたが、雲水の姿は見えぬ。此寺では五人の人も頼めぬ。總拜請しても師家役位大衆、引ッ括めて婆子一人ぢや。龍潭の婆子か臺山の婆子ならばぢやが、興國寺の婆子ぢや大會には役に立たぬぢや。

一六五　六十年前に掛けた大願の願解き

美濃の三僧堂――三回目の遠州奥山――昔を思出す道々の茶畑――山の規矩も弛んだやうぢや――半僧坊の鼻と南天棒――道力堅固ならば護法善神が佐輔――鎌倉の圓覺寺と建長寺――僧堂は噂程にない――切らうとした刀が二本も折れた――髻の中に地藏尊

衲は美濃の三僧堂たる正眼と瑞龍と虎溪との拜請を了して、遠州の奥山へ向ふた。奥山は十九の時の碧巖會が初めで、今度で三回目ぢや、龍水大和尚の碧巖會の頃は中々不便ぢやったが、年と共に進歩して、今日では濱松から輕便鐵道もある。道々の茶木畑を見るにつけ、六十年の昔サ、

彼の邪僧が半僧坊に引攫はれたのが思ひ出される。奥山も其の時分とは大分變化して、何んとなく俗化して來た。山の規矩も弛んだやうぢや。今は龍水さん時代のやうな禪道家は少いらしい。それから半僧堂に參拜して、六十年前に掛けた大願の願解きをやつたぢや。半僧坊の鼻も高いが南天棒も太いぞ。

此の奥山は唐の天臺山に似てをるので、寺も方廣寺と云ふとサ。山の中に白崖峰と云ふがあるさうぢや。方廣寺は是榮居士の建立で、開山は　後醍醐天皇第十一の皇子、聖鑑國師と云ふ方ぢや。半僧坊は此の開山に就いて化度を受け、此の山を守護すると誓つたのぢや。佛法には有り難いことに、道力堅固ならば、此のやうな護法善神が何時でも佐補するぢや。

奥山が濟むと直に濱松へ引返して、更に鎌倉の圓覺・建長へ行つて拜請した。宗演和尚も必らず行くと云ふて受合つてくれたのは嬉しかつた。僧堂は噂程にもない、今ま少し引締めた方が好いぢや。圓覺は瑞鹿山と云ふて、鎌倉五山の第二位ぢや。北條時宗の創建で、佛光祖元禪師の開山ぢや。

建長寺は五山の第一位で、北條時頼の創建ぢや。此處は昔仕置場ぢやつたが、時頼の代のことサ、濟田とか云ふ罪人を斬罪に處せやうとしたが、どうしても斬れなくて、刀が二本も折れた。

ソコデ濟田を調べてみると、髻の中に地藏尊が入れてあつたと云ふので、其の地藏尊を取出して本尊とし、此の建長寺を建てたぢや。開山は歸化僧の道隆と云ふて卽ち大覺禪師ぢや。一遍上人も此の山で修行したぢや。今ま鎌倉の二大山、那邊の衲僧を打出するか見ん。

一六六　深紅の楓樹から一足飛に屋根と電柱

江州の永源寺――何時來ても飽かぬ――二千人を打出した寂室も衲にはかなはぬ――實全和尙は中々請けぬ――辭するのが禮儀――境に於て面白い――名古屋の德源寺は肉山――飽食暖衣修道を怠るのが遺憾

十一月に入つてから江州の永源寺行きをやつた。雨が降つて路は難義ぢやつたが、衲は俥サ。昔は是れ袈裟文庫を引掛けて、勢好く天下の衲僧で、此の路もスト〳〵歩いたものぢや。それを思ふと衲も年を取つたわい。ソコデ前の日にサ、江州の八幡から輕便で八日市へ着いて一泊したぢや。

永源の境は何時來ても飽かぬ。時しも楓が紅葉し掛けて、それが最ッ盛りでないのが好い。佐々木氏頼が建てた寺ぢや。開山は有名な寂室禪師ぢや。寂室は二千人の僧徒を打出したと云ふが衲には敵はぬぞ。其の後織田信長が此の寺を燒いたがサ、寛永の頃、後水尾上皇の勅を奉じて、

佛頂が再興したのぢや。今の管長は廬津實全和尙ぢや。水齋に來て吳れと拜請したが、和尙は中々請けなんだ。再三再四の上點頭してくれた。併し此の辭すると云ふのは禮儀ぢや。やう〳〵お請が出來たので直に暇乞して門前に待たせて置いた俥に乘り。雨のシト〳〵降る中を名古屋へ來たぢや。

名古屋は矢ッ張り賑やかぢやつた。永源の深紅の楓樹から、一足飛に屋根と電柱との他は眼に入らぬ名古屋へ出たのは、境に於て面白い。德源に行つて碧松軒（關廬山）に相見し、拜請も無事に濟んだ。大衆も承知してくれた。此の僧堂は肉山ぢや、中京の富豪が夫々の寄進で豐かなものぢや。併し豐かすぎて、少しく飽食暖衣、修道を怠ると云ふ風が見えたのは遺憾ぢつやた。

一六七　法子の養成を怠るは佛種を斷つのぢや

越中の國泰寺――肉附の拂子――今は末寺も少い――「敕願」の二字は禪坊主を造る爲め――甲州の向嶽寺――惠林寺の新設僧堂――今の世に僧堂を設けるは感服――快川和尙で有名――叢林變じて焦土――「安禪」の一句を殘して火定

越中の國泰寺行きぢや。是れは餘り行かぬ寺ぢや、道場破りの時しか行かぬ。此の寺は高岡驛からは直ぢや。後醍醐天皇の勅を奉じて、惠日聖光が開山したのぢや。此寺には肉附の拂子があ

る筈ぢや。昔は末寺も多かつたが、今は少くなつたさうぢや。拜請のことは濟んだが、どうも雲衲が無いからと云ふので其の方は斷られた。「勅願」の二字は何かサ、それは禪坊主を造るための伽藍と云ふことぢや。然るに其の禪坊主がないとは、實にハヤ嘆かはしい。佛祖の命脈を繼承する法子の養成を怠るのは佛種を斷つのぢや。と衲は思はず涙がこぼれた。

それから甲州の鹽山へ出て、向嶽寺を拜請したが、此寺も雲水が足りぬので大會には行かれぬとのことぢやつた。向嶽の風致は格別に好い。恐らく甲州第一ぢやらう。又た其の足で惠林寺へも行つた。是れは近來新設の僧堂ぢや。まだ大衆も少いと云ふことぢやつたが、今の世に僧堂を設くる其の志は感服の外はない。衲も雙手を擧げて喜ぶぢや。惠林寺は快川和尚で有名な寺ぢや。昔し二階堂道蘊が開基して、開山が夢窓國師ぢやが、中興に大通智勝がある。又た武田信玄が快川を請じて中興としたぢや。併し武田氏滅亡の後、織田信長の爲めに叢林變じて焦土と化した時快川は例の

「安禪は必らずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も亦た涼し。」

の一句を殘して火定に入つた。ぢやから此寺の雲衲たる者は、此の快川和尚の最期を忘れずに佛祖の爲めに身命を拋つが好い。今の師家の棲梧寶嶽和尚は願心があるから結構ぢや。

一六八　どんな者がひよろりひよツくり

野火止の平林寺――關東一の富貴な寺――智惠伊豆の菩提所――修行に骨折る坊主が無ささう――久し振りで東京へ――庵原の平四郎の出生地――樹下會で揭唱――五家の特長――人天濟度には法財が豐か　居士なら居士で好い

東京の池袋の驛へ未明着いたのは、十一月の中旬頃ぢやつた。驛前の家は何れも未だ寢て居る。辨當を喰ふのに困つた處が、幸ひ車屋の老爺が起きたので、茶を一杯貰ふて朝飯を濟した。隨行の者等は閉口して居つたが、六時何分かの汽車で野火止の平林寺へ行つた。此處にも今は僧堂がある。衲は明治十二年の暮に、僧堂を設けると云ふので、一度來たことがあつたがサ、其の頃に比べると樹木なぞも減くなつて居るが、兎に角關東一の富貴な寺ぢや。是れは元來岩槻にあつたのを、松平輝綱公が此處へ移したので、智惠伊豆と云はれた松平伊豆守信綱の菩提所ぢや。今日僧堂のあるのは喜ばしいが、修行に骨折る坊主がなささうぢやつた。拜請の事濟んで齋坐の饗應を受け、是非一泊をと云はれるのを、東京へ出る都合で辭退して東京へ來て、小石川の加藤鎭之助方へ投宿した。加藤は楠妣庵建立の願心のある男ぢや。其の楠妣庵卽ち觀音寺と衲の寺とは深い由緣がある。何んにしろ久し振りで東京へ來たのぢやから、墨蹟の依賴山の如しぢや。道林寺

の亮卿が來て手傳をしてサ、一寸二百枚ばかり書いた。それから市内の拜請すべき處へは代理の者を廻らせた。

其の歸西の途にサ、東海道筋に當る駿河の庵原へ寄つた。此處は平四郎の出生地ぢや。江湖では平四郎に依つて庵原を知つて居る。此處に樹下會と云ふがあつてサ、衲が前に鎌倉へ拜請行きの時一接心したが今一回是非にと云ふので、時間の繰合せをして、今度寄ることにした。それは十一月十九日ぢやつた。庵原の山梨家へ行つては、「五家參詳要路門」を提唱したぢや。

五家の宗風を知ると云ふことは甚だ肝要ぢや。第一の臨濟宗は機鋒を戰ふが、第二の雲門宗は言句を擇ぶぢや。それから第三の曹洞宗は心地を究め、第四の潙仰宗は作用を明め、第五の法眼宗は利濟を先にするぢや。此の處を篤と呑込んで居らぬと、宗旨家となつて、人天を打出することはならぬぞ。然ればサ、人天濟度には法財が豐かでなくてはいかぬ。サー何時、どんな者がひよろり、ひよつくり出て來せぬでもない。ソコデ居士なら居士で好いがサ、居士が其の儘直に坊主にならうとするのは中々ぢや。正受老人なぞは幼少の時得度して、誦經も何も彼も一通りの僧行をやつたから、居士で暮して居つても何時でも坊主になれるぢや、坊主の日用學問は矢張り小僧時代に實地に覺えぬと駄目ぢやわい。居士が起つて濟度に臨まうとするならばサ、しつかり坊

主業をやらなければ眞箇でない。ぢやから坊主でないものが、生半可に坊主の眞似をしてはならぬ。居士は居士でやるが好い。

一六九　今日は虎になりましたと管長の挨拶

岡山の曹源寺――七八十人の大衆が今は僅か三人――此の堂内の輻湊する時は何時か――海苔と糊――國清寺――安藝の佛通寺――愚中周及禪師――日本廿四禪流の一――日本にも斯んな處があるかと思ふ位――流石一派の本山――大衆は如法――衲は和尚の意氣を飲んだ

十二月二十一日と云ふ日に岡山へ着いた。曹源の僧堂拜請の爲めぢや。天氣の好いのが何より心地好い。此寺も昔は度々訪ふた。いつも草鞋掛けぢやつたが、今日は俥で乘り込んだ。大門の道路も一直線に出來上つてをるので、大分昔とは樣子が變つてみえる。此の寺は儀山和尚の道場で實に名刹ぢや。參學の衲子は、何時も七八十人は下らなかつたが、今は僅か三人ぢやとのこと。叢林の寂寞は實に本宗の命脈に關するぢや。禪堂は第一第二とある。何時かは此の堂内が輻湊する時もあるぢやらう。圓山全提和尚は淡泊な人で、

「大衆はないから行かれぬが、衲は屹度行く。」

と云はれた。それから酒を出されたが、小僧が海苔と糊とを間違へて酒の肴に持つて來たのは可笑しかつた。三人の大衆の門送に預つて下山したぢや。

其の途中、國清寺と云ふがある。此の寺は池田輝政の建立で舊は姫路にあつたが、國替と共に岡山へ移したのぢや。僧堂はないが境内に請すべき人があるので、隨行の亮卿を使僧として遣り、衲は直に岡山驛へ行つた。

それから安藝の佛通寺へ行つたのは其の翌日ぢや。佛通寺は愚中周及禪師が曆應三年の頃、大元へ渡つて、楊子江の細金山龍遊寺の卽休翁に參叩し、歸朝してから開いた有名な道場で、卽ち日本二十四禪流の一つぢや。開基は小早川春平ぢや。實に風景幽邃の地で、日本にも斯んな處があるかと思ふ位な奇岩怪嶂相連つて居る。何時來てみても感に堪へるぢや。山の周圍は六里餘りあると云ふ。衲が初め來た頃は殺生禁斷の山ぢやつたが、今は左樣でもないさうぢや。

本鄕驛から俥で、犬の奴が先曳きぢや。朝風に霜を踏んで、午前九時に佛通寺に着いた。滿山凍つて人の吐く息は白煙のやうで、指も落ちさうぢや。寺は小なりと雖も流石一派の本山ぢや、伽藍も完備して居つた。一山手厚い待遇で、何よりも嬉しかつたのは大橋の炬燵ぢやつた。亮卿が知客寮で拜請のことを賴み終つた頃に、管長の圓山雪庭和尙が、ひよつくり出て來て、

「今日は虎になりました。」

との挨拶ぢや。何故かと云ふたら、竹籤の調をやつたとサ。虎は禪には大分緣がある。佛通寺の經濟も仙臺樣の御紋ぢやないが竹で持つかサ。此寺の僧堂は大衆と云ふ程のことはないが、いかにも如法ぢやつた。それに何處となく親しげな風のあつたのは好い。何はなくとも今ま酒を一杯と云はれたが、實にハヤ酒屋へ三里、豆腐屋へ三里の佛通寺ぢや。此處で酒の來るのを待つと日が暮れると思ふたから、折角の和尙の厚意を無理に謝して下山し、本鄕驛へ急いだ。途中で佛通寺の使らしい男が酒を脊負つて歸るのに出逢ふた。彼の酒は衲への贈り物ぢやらうが、今は間に合はぬ。併し、衲は和尙の意氣を飲んで歸つて來たぢや。大衆の常在は六人と聞く。

一七〇　今の人は自分の腹で産出さぬ

一先づ行脚の仕納め――一擧手一投足皆な勘破――宮島詣――お山巡りをせぬが物足らぬ――岩國の錦帶橋――鐵材の多い國と木材の多い國――木材を鐵材の代りに――まだ修行が透つて居らぬから――一本の釘さへ打ちたくない――大工禪をやつた者

衲もサ、今度は一先づ行脚の仕納めぢや。諸方の善知識の室内を點檢するまでもなく、一擧手

一投足、皆な勘破ぢや。ぢやから今回は名所古跡も一通り廻るとにして、先づ宮島へ參詣した。衲が雲水時代には櫓一本でやつた渡船も、今は汽船となつてをることを思ふと、大した變り方ぢや。而も汽車と連絡してあるから便利なものぢや。道連の者が紅葉谷の岩惣へ投宿すると云ふから、衲も其處へ泊ることにした。若い頃此の岩惣で雲衲を大事にしてくれたことが思ひ出されるぢや。

宮島の峰には有名な古跡があるから登らうとしたが、亮卿が無理に止めるので遂に行かなんだまだ〳〵嚴島を二三遍廻つたとて何んのこともないが、入定と大會とを終る間は大切ぢやとばかりで、とう〳〵止めたが、道連の同宿の者はお山巡りをしたと聞いて、少しく物足りぬ感じがした。翌日は本社に參詣して、そこで同行の人々と袂を分つ積りぢやつたが、是非岩國まで案内をと云はれ、若い時分の元氣に返つてサ、よし案内してやらうと、岩國公園へ出て吉香神社に參詣し、錦帶橋を上からも下からも見物した。

現代は工業が進歩して居るから、錦帶橋位は何んでもないと云ふぢやうがサ、中々さうでないテ。今時の者は大抵人眞似で、自分の腹から產み出すと云ふことがないから心細いぢや。日本のやうな鐵の小い國でも、鐵で無きや仕事が出來ないと云ふ技師が多い。鐵の澤山な國なら、小い

木材の高いのよりも、鐵が安くて丈夫ぢやらうが、我が國なぞは鐵が小くて木材は多い。ぢやから木材を以つて鐵材のやうに使用する方法を考へ出さなければならぬのに、然はなくて、鐵で無きや不可ぬと云ふはつまり未だ修行が透つて居らぬからぢや。錦帶橋なぞは、一本の釘さへ打ちたくないと云ふたと聞く。よくマア木材で彼れだけに組み立てたものぢや。餘程腹の修行の出來たものぢや。大工禪をやつた者ぢやわい。今の大工は腹でやらずに頭でやるから、人眞似よりか出來ぬ。情けないことぢや。

一七一　百里懸けて出掛けても是れぢや

驛前の茶見世——德山以上の南天棒——相手になる婆子がない——一寸風邪氣——ひどい雪と風——八十九で雪中を一里——中々世の中は油斷がならぬ——玄宗皇帝の鶴の枕——伊萬里の圓通寺——此寺も叢林とは名のみ——氣の利かぬ坊主——普通學林ばかり繁昌

岩國の停車場へ行つたのはモウ夜ぢやつた。聞けば下の關行は四時間も待たなければならぬと云ふので、詮方なしに驛前の茶見世で休息ぢや。此の茶見世には婆々も居らぬ。德山以上な南天棒はをるが、相手になる婆子がない。併し婆子の代りに女中が酒と豆腐とを持つて來てくれた。

程好い頃まで傾けたが、土地の急變の爲めかサ、一寸風邪氣ぢや。鼻水が出て年寄臭い。亮卿が心配して體溫を計つてみて、熱があると云ふて騷いだが、衲には何んの苦痛もない。夜中の十二時二十三分と云ふに岩國を出發して長崎へ向つたぢや。

なぜ長崎へ行くかと云へば、長崎から船で衲の自號地雄香寺へ行く都合からぢや。伊萬里からも行けるがサ、一番便利の好いのは長崎ぢや。衲もサ、今度は末後廻りぢや。なるなら浪風の無い方から行かうと思つて長崎へ出たのぢや。處が折惡しく酷い雪と風で、玄海灘の船中では迚も顏を出してはをられぬ、毛布や手拭を冠つた者が澤山あつた。長崎へ入つた時は雪で眞白ぢや。停車場へ着くと、下村有と云ふのが迎へに來て居つて、今町の綠屋と云ふ宿に案内してくれた。翌日も雪ぢや。そこへ下村の父がやつて來た。何歳になつたと聞くと、八十九ぢやといふ。衲がいくら偉らさうに云ふても、下村には敵はぬ。八十九にもなつて、杖なしで雪の降る日に一里の路を歩いて來るとはサ。實に偉いものぢやと思ふ。こんな奴があるから中々世の中は油斷がならぬ。

此處の縣廳に居る吏員に衲の居士があるので、それが花月と云ふ料理店から賴まれたと云ふ特請で、止むなく腕車で雪の中を花月へ行つた。佛間の莊嚴は長崎でなきや見られぬ。此の家には

賴山陽や阪本龍馬なぞの書が澤山あつた。衲にも書けと云ふので、畫帖と畫箋とに書いた。四五十枚ぢやつたらう。又た有名な玄宗皇帝の鶴の枕と云ふも見た。枕も立派なものぢやが、其の枕を包んであつたのが又た好かつた。それから家内の者に「三歸戒」を授けて、雪の中を市内巡りをやつた。風邪の熱は可成り有るらしかつたが、びくともせぬ。名所も殘らず見終つて平戸行を待つたが、風雪の爲め出船がない。佐世保か伊萬里からなら出るぢやらうとのことで、遂に伊萬里へ廻つた。衲の考へでは。戻り路に伊萬里へ出るつもりぢやつたが、船の都合で伊萬里が先になつたぢや。

ソコデ圓通寺の專門道場を訪ふた。雪の降る最中ぢや。寺は伊萬里灣を一目に見下す風景絕佳の地にある。元と田雜玄蕃が城を捨てゝ寺としたので、萬里明山と云ふやうな高地ぢや。それで山號を萬明山と云ふかサ。併し此寺も叢林は名のみぢや。和尙は檀用で不在とのことで、知客さんも居らぬ。亮卿の奴が閉口して仕舞ふた。取次に出た坊サマも氣の利いた奴ぢやないので、取次いで玄關の障子を八字に開いた迄は好かつたが、其の儘出て來ぬぢや。まるで宵の三日月樣ぢや。ソコデ亮卿が庫裡から處々を訪ね廻り、やつと知客寮際の小室に居るを見付けて呼出し。拜請の件を賴み置いた儘下山した。イヤハヤ湯も茶もない。枯淡と云ふも亦た極れりぢや。百里懸けて

出掛けて來ても、時に依れば是れぢや。道に骨折る坊主がなくなつて來たのが知れる。普通學林ばかりが繁昌で、禪學林は一向不景氣々々々。衲等の雲水時代の面影はないぢや。ソレデ拍子の悪い時は仕方のないもので、風雪の強い爲め此處からも船は出ぬと云ふ。遂に平戸行きは思ひ止つて熊本へ行つた。

一七二　今見ても青龍の四五疋は居さう

熊本の見性寺と蘇山――衲は東京に籠城――乃木さんが田原坂に遺憾の敗――加藤清正の築城――石垣の間に草が生えぬ――「句双紙」三年小僧泣かせ――耳を掩ふた丹霞――久留米の梅林寺――第二の故郷――矢ッ張り天下の道場――居眠りでもして井戸へ落ちたら――水天宮へ參詣

熊本は衲が法祖爺の地ぢや。武士でも力士でも學者でも禪坊主でも、誰れか一人傑物が出ると其の土地の名を高めるものぢや。熊本は加藤清正の居城として名高い。それに清正の信仰の厚かつた本妙寺があるので、日蓮宗ぢや知らぬ者はない。我が宗でもサ、蘇山老漢の名の響き渡つてをると共に、又た見性寺を知らぬ者はないぢや。併し見性寺も今は見る影もなく衰へてをる。世間の御多分には洩れぬ。

熊本へ來た次手にサ、本妙寺にも水善寺にも往き、又た谷干城が籠城した跡をも訪ふた。衲はあの時は東京の大教院へ出てサ、關東に一大道場を設けやうと、四人の者と共に管長の命を楯に東京に立籠つたものぢや。同じ籠城でも谷干城は熊本に、衲等は東京ぢや。乃木さんが田原坂で遺憾の敗を取つたのも其の時ぢや。大將が修業の時は何時も田原坂が出た。「露双劍」を手に入れた時も、其の遲かりしを恨みとすると云ふやうなことに口にせられたことがあつた。

清正と云ふ人は築城に妙を得た人ぢや。彼の石垣の無寸草な積み方は又た格別ぢや。草は何處へでも生えて困るがサ、熊本城の一方だけは石垣の間に草が生えぬ。其處は清正が自分に築き上げたのぢやと云ふ。衲等の小僧時分は草取りで泣いたものぢやよ。「句双紙」三年小僧泣かせと云ふがサ、草にも小僧泣かせと云ふがあるやうぢや。昔、石頭の下に行者ぢやつた丹霞がサ、草を刈ると云ふた石頭の前に、自分の頭髪を濕して剃髪を乞ふた。石頭が、我が意を得たりと落髪してやつてサ、それから持戒を說いたら、丹霞は耳を掩ふて逃出したさうな。面白い奴ぢや。衲の熊本城の話も大分長いので耳に栓かな。ぢや久留米へ移らうかい。

久留米は衲が第二の故郷とも云ふべき地ぢや。何時行つても厭かぬ。梅林寺へ行つて拜請のこともゝ濟んでサ、久留米酒の饗應に預つた。庭も殿堂もすつかり手が入つた。本堂の襖は少し金ピ

カ過ぎるのが瑕ぢやが、流石に立派に出來上つた。そして此寺は矢ッ張り天下の道場ぢや。雲衲も澤山居つた。叢林の規矩が能く守られてをるのは感心ぢや。是れでなければ傑物は出ぬ。

それから大綱正宗禪師と猷禪大和尚の拜塔を終つてサ、衲が簀の子を敷いて坐したと云ふ井戸を亮卿にも見せた。此の井戸のことは前に云ふてある。若しサ、衲が簀の子の上で居眠りでもして、此の井戸の底へ落込んだら、救ふことも上げるともならぬので、今頃は骨も溶けて無うなつてぢやらう。今見てさへ井中には青龍の四五疋が棲んで居さうぢや。近頃「南天さんが坐つた井戸は是れか」と、見物に來る人があつて危いから、圍をしたと云ふので、柵が出來て居つた。それから山作務に使つた天秤棒の話なぞをして梅林寺を辭したが、大衆の門送を受け、又た和尚はサ、特別に停車場まで送つてくれた。衲は水天宮へも參詣して、「心經」一卷を讀誦したぢや。

一七三　扶桑最初禪窟の古刹

天拜山――打坐一炷した舊蹟――純白の庭に朱塗の棲門や神橋――衲には衲の心得がある――國寶の觀音――支那の土を移して燒いた布瓦――榎寺の跡――頑固な老爺――博多の聖徳寺――開山は榮西――叢林中では引締つた方

衲が若い時天拜山に登つて、打坐一炷したことがあるから、其の舊跡を訪ふて昔を偲ばうと、

太宰府へ參詣した。前日來の雪で天拜山へも迎も登れぬが、兎に角腕車を驅つてサ、朝七時と云ふに二日市の宿屋を立つて出掛けたぢや。降るわ〳〵、雪は小歇みもなく降る。天滿宮の庭は純白ぢや。其の眞白の廣庭に朱塗の棲門や神橋は、宛然土佐繪を見るやうぢや。今日はモウ是れ十二月二十八日ぢやから、松飾りも注連飾りも出來て、新年を迎ふる準備が整ふて居つた。ソコデ例の反橋が正面ぢやから、衲は正面から參詣すると云ふのにサ、亮卿が辷るから危いと頻りに留めたが、衲には衲の心得があるぢや。構はず橋を登つた。車夫の奴が後から尻を押した。雪が踝の上一寸位あつたから、三四寸は積つたのぢやらう。

參詣を終つて亮卿の爲めに寶物を見せてサ、それから觀音寺の跡や戒壇院へ廻つた。國寶の觀音、廬舍那佛の大像、支那の土を移して燒いたと云ふ布目瓦なぞも見た。又た菅公の常在せられた榎寺の跡をも訪ふたが、榎寺とは名のみで只だ六尺四方の石臺があるのみぢや。

榎寺菅原公の夢の跡

かサ。それから停車場へ行つて博多行きぢや。車夫共は路の惡いのと車が重いので汗みどろぢや。衲に歳は何歳ぢやと問ふから、

「サーもう三日ばかりしたら八十ぢや。」

と云ふたら、車夫は驚いたとみえて、歸りしなに、

「なんと云ふ丈夫な人ぢや。天神樣の橋を渡ると云つて聞かなかつたが、頑固な老爺ぢやな。」

と云ひながら行きをつた。

雪の中を博多に着いて、直に聖福寺へ行つた。實に古刹ぢや。建久年間源頼朝の開基で、扶桑最初禪窟の地ぢや。開山は明庵榮西禪師ぢや。衲は吸古室（龍淵東瀛和尚）に、亮卿は知客寮にそれ〴〵拜請の用務を終つて下山した。大衆の門送如法ぢやつた。吸古室が停車場まで見送つてくれたのは嬉しかつた。衲が廻つた叢林の中ぢや此寺なぞは引締つた方ぢや。歸途に俥の上から見ると、公園の日蓮の像が横面に雪を受けて、半白半黑になつてゐたのは妙ぢやつたよ。

一七四　愈々古稀とは永の離別

雪と腫物の爲め別府で越迎――宇佐八幡宮――八十と書くの外はない――大分の萬壽寺――山門上の羅漢――佐伯の養源寺――別府のお別れに地獄巡り――八里の路を徒歩――是れなら死出の山も自動車に用はない

唐津へ兩親の展墓に行く都合ぢやつたが、雪と腫物の爲め意に任せぬから、唐津の墓參と佐賀の拜請は亮卿を遣ることにして、衲は臘月三十日から元旦を別府で越迎しやうと、亮卿とは博

多で分れた。聖福では侍者を附けやうと親切に云はれたが、まだ大丈夫だからと無理に斷つてサ、一人で別府へ來る途中、宇佐八幡へも參詣して、七十年來神護の禮を云ふたぢや。

大正七年の元旦を迎へて、衲も愈々八十歳と云ふことになつた。亮卿も三十一日の夜行で別府に着したので、亮卿を雜煮の餅を買にやつたら、目方で賣つて居つたさうぢや、ソコデ元朝には宿屋の床の前で　天皇陛下の聖壽無疆を祝した。それから一日には新年の書初めをやつた。是れ迄十年間は古稀加何々と書いたが、今日からは八十と書くの外はない。古稀とは永の離別ぢや。

無事に一日を過ぎたので、二日には大分の萬壽寺に登つた。新年の客には小倉の市長が來て居られた。日當りの好い室で屠蘇の饗應に遇ふたが、勞煩を謝して下山した。雲衲は十三名居るとのことぢや。此の寺は國主大友貞親の建立で、開山は佛印禪師と云ふぢや。今の山門上の羅漢を造つたことなぞ、古人の傑れた行履を傳ふる話が殘つて居る。

それから佐伯の養源寺へ登つた。堂塔伽藍が能く揃ふてをる。和尚は開堂前で非常に多忙ぢやつた。拜請の用務は濟んで、矢ッ張り屠蘇の饗應に預つた。前住の天寧和尚とは維新後、共に禪道興隆に東奔西走した緣故もあるから、拜塔して下山した。其の時別府の浴客の中に、衲の大姉の全庸全貞の二人が居つて、此の人等も養源寺へ參詣したぢや。

是れで先づ九州の僧堂は一巡濟んだ、是れから四國ぢや。別府のお別れに地獄巡りをやつてみたが、まだ中々歩けるよ。坊主地獄や海地獄や、八里ばかりの路を徒歩で歸つた。若い時から足は固めてあるから歩けるぢや。なにサ、是れなりや死出の山も自動車を頼む用はないぢや。

一七五　明治維新の瑕は是れぢや

四國行き――一遍上人の誕生地――日本最初の道後温泉――佛體を無理に神體――國民の信仰を惑はす――琴平へ參詣――あれが巫子とは可厭になる――自動車も俥もペケ〳〵――屋島見物――足では弘法に及ばぬ――德島の高源寺――立派な禪堂も今は使用に堪へぬ――四ヶ月に三十三ヶ處――こんなことは衲が打止めに――南天棒に負けぬ猛者

衲は如何も船は好かぬ。若い時から嫌ひぢやつた。併し四國へ渡るにや如何しても船に乘らなきやならぬ。ソコで別府から船で德島行きぢやが、一直線の船はない。高松で乘替へなくてはならぬ。然もないと大阪廻りとなるので、詮方なしに高松乘替へと定めて船に乘つたが、餘り船路か長いので、途中松山へ寄る爲めに高濱へ降りた。松山の正宗寺には、衲が道林寺に居つた頃隨身してゐた佛海がをるが、今は滿州邊に渡つて居るとのことで訪ねなんだ。又た此の松山は他力

の安心から自力の禪に入り、禪を立場として他力安心を擧吹した一遍上人の誕生地ぢや。

それから道後へ行つて一泊した。此の溫泉は日本最初の溫泉ぢや。衲の若い時は藥師樣が本尊で、藥師の藥王があつたが、今では其れも大國主神の玉ぢやとか、事代主の神の玉ぢやとか云ふてをる。どうして佛說や佛體を無理に神體にしたものかサ。明治維新の瑕は是れぢや。神は神、佛は佛で好いのに、それを矢鱈に神に代へ、歷史も地理も革めてサ、殊更に國民の信仰を惑はすやうにして仕舞ふた。神や佛も人の勝手自由になると、斯うして僞りの神社も出來るのぢや。昔は佛樣ぢやつたが、今は神樣になつたと云ふ神社が澤山ある。道後の湯を見出したのは佛者ぢやと云ふのにサ。

又た船中の人となつて高松へ着いた。是れから自動車で德島行きをやらうと思ふたが、自動車が德島へ行つた儘歸らぬと云ふ。田舍のことぢやから呑氣なものぢや。晩には自動車が戻るとのことぢやから、一日を琴平參詣とした。神社に詣でると、丁度東京の人らしい連中が神樂を奉納してサ、六人の巫子等が舞曲を奏して居つた。衲は例に依つて誦經をして、奥の院へは亮卿を代參に登らせた。やがて山を下る時、先刻の巫子等が髮をいぼじり卷にし、着物は筒袖、色の茶がかつた足袋に、齒の缺けた日和下駄を穿いて、女人坂を下りて行くを見た。スルト又た先刻の奉

納主が、それと前後して下りて行くぢや。東京の人が、

「あれが今の巫子かと思ふと、可厭になつて仕舞ふ。」

と云ひ合つてゐたが、施主でない衲等でさへ可厭な氣がしたよ。

參詣を濟して高松へ歸つたが、自動車が確定らぬので築港へ一泊した。其の夜も亮卿が再三電話で自動車を尋ねたが、まだ戻らぬと云ふので、止むを得ず俥にしやうとして直段を掛合つた。衲が行脚中には八貫で駕籠が徳島へ行つたから、今ぢや三圓も遣つたら好からうと思ふと、八圓吳れと云ふ。それで辨當は此方持ちぢやと。驚いた／＼。自動車も俥もペケ／＼。愈々船と云ふ段になつた。

處が撫養港へ行く船は正午の出船ぢやと云ふので、半日をボカンと宿屋の二階へ立籠るも藝がないと、午前中に屋島寺を見て來やうと、夜明けの五時の電車で屋島の麓まで行つてサ、それから往復八里の嶮路を徒歩でやらうとしたが、亮卿が聞かぬので、とう／＼衲は山駕に乘つた。亮卿は山駕に附いて登つてサ、壇の浦の風光を賞し、屋島寺の首洗の池も見、遙かに五劍山を望んでは、弘法大師の足の達者なのに感心した。衲も足では弘法に及ばぬぢや。

それから下山して十二時の船に乘つた。撫養港へ着いたのは夜の十一時ぢや。徳島からは中西

が迎へに來てゐた。其の夜は其處の宿屋で明して、翌日汽車と川蒸汽の連絡で徳島へ着いた。直に高源寺へ行つて拜請のことは濟んだがサ、高源寺は見るに堪へぬ荒れ方ぢや、衲が兄弟同樣にして居つた眉山が不良棟から氣の毒なものになつた。此の禪堂も立派なものぢやつたが、今は使用に堪へぬ。規矩亦た立兼ねてぢや。此處では衲の居士等が集つて一席茶話會を催してくれた。翌日は神戸へ直航で、達磨會に安着した。

是れで先づ／＼全國の臨濟宗の道場は巡り終つたぢや。衲も是れ、ハヤ八十の老耄ぢや。何んの商量することがいらうかい。又た商量しやうとして出て來たのでもないぢや。只だ一意、開山無因禪師五百年遠諱と、末後の大會との拜請に外ならんぢや。僅か四ヶ月そこらの間に、全國を掛けて三十三ヶ處の道場を歴訪することの出來たのは喜ばしい。是れで衲が發心の最初に於ける願心が成就したのぢや。靑壯老の三期に、日本の全道場を遍歴した譯ぢや。マア／＼こんなことは衲が打止めぢやらう。どうか南天棒に負けぬ猛者が、我が禪會から出て欲しいものぢや。

一七六　入定までに安名した居士大姉

明治十八年より大正七年に到る迄——居士五百二十三名——大姉百二十四名——

事實の上の證明

衲は入定前に安名すべき者には夫々居士大姉號を與へてサ、一代の總勘定をしたぢや。ソコデ明治十八年に東京麻布曹溪寺の花園選佛場で初めて在家の人を接得して以來、大正七年入定に至るまでの居士大姉は、マアざつと斯んなものぢや。併し是れは衲の會下全體を云ふたのぢやない只だ居士大姉號を與へた者だけを擧げたぢや。入室した者を一々數へ立てた日にや、何千と云ふ人員ぢやから、それを悉く此處へ記せると云ふは迚も出來ない。又た僧侶の分は一切省略することにした。それから此の中には、故人となつた者もあるがサ。其の儘記して置く。此の人名を見ても、衲が始終口癖のやうに、何百人打出したと云ふのが、徒らに空言でないことを知るが好い。

無所屬「曹溪選佛場、道林江湖道場」（居士百三十五名、大姉二十一名）

鐵舟居士　山岡鐵太郎　自素居士　山口　素臣　智勇居士　仲木　之恒　藤園居士　兒玉源太郎
石樵居士　乃木　希典　無得居士　河野　廣中　自光居士　安田　光義　禪熊居士　本山　熊彦
自永居士　横地永太郎　禪勝居士　鶴殿　家勝　道齊居士　今小路正之助　桂巖居士　綺田　貫
貫通居士　書上　謙三　一哲居士　別府　金七　浩然居士　金　浩然　無用居士　伊藤　徹
直指居士　岡倉　龍　鐵肝居士　近藤欽一郎　寶丹居士　守田治兵衛　浩焉居士　吉益　正雄

朝隱居士　根本清兵衛　可哉居士　橋爪　音助　不染居士　大庭　寛一　大拙居士　北代　正臣
宗龍居士　大森　宗龍　自達居士　三木平三郎　寂道居士　片山　恭平　全和居士　和田和三郎
智達居士　中島靖九郎　一徹居士　二木　政裕　義觀居士　城戸城太郎　一誠居士　富田　信
不著居士　板野常太郎　得心居士　淺野長五郎　洗心居士　松村洗太郎　賢忍居士　北村　貞幹
鐵山居士　中田　元重　鐵樹居士　渡邊藜太郎　自得居士　鈴木　健　僊一居士　山本　忠輔
志道居士　志道　信一　鐵針居士　内田宗太郎　自適居士　橋本　實顯　不識居士　田中元治郎
政敎居士　鮫島　政敎　天然居士　長瀨　義幹　自安居士　伊賀　氏理　耕雲居士　西田　龍太
鐵巖居士　香川善次郎　玄空居士　田中恭太郎　白喚居士　松井　量吉　穉龍居士　小島　慧準
一機居士　永井源之進　自透居士　古關　唯助　了無居士　宗　重望　全達居士　日高　達三
二休居士　辻村　半六　無禪居士　眞坂　忍　了悟居士　吉田　氏義　廓然居士　武谷　治郎
自然居士　花山院家威　有染居士　圓尾孫次郎　道一居士　津田亥七郎　登龍居士　志村　登
一機居士　關口　多造　清夢居士　堤　長發　快翁居士　田中彦九郎　自性居士　近藤　正愿
自錐居士　前野　長治　自琢居士　田中　香城　檀隱居士　飯田　政熊　自貫居士　杉浦　善七
瓦介居士　加島　瓦介　兩寶居士　加島　信成　自關居士　山脇　楠馬　自明居士　花木捨四郎
靈山居士　大江　蘇一　自克居士　弘田久壽治　自得居士　木原鹿之助　自徹居士　馬淵　曜
自鐵居士　伊藤　繁丸　自照居士　木原乙之助　自錐居士　兒玉　成夫　翠黛居士　堀尾　榮一

鐵肝居士　坪野平太郎　龍溪居士　岸野常太郎　覺海居士　田邊增次郎　普願居士　牧田又三郎
不時居士　赤井政次郎　貫道居士　上林喜三郎　磊々居士　岩山　高房　咄哉居士　木元五三太
鐵心居士　寺本　武治　增雪居士　觀世　清廉　秋濤居士　長田　忠一　禮一居士　寺田　禮一
賢忍居士　柳瀨　筆三　貫一居士　森田萬兵衛　寶泉居士　川井巳之助　自得居士　板東　幸平
自照居士　有岡太兵衛　栽松居士　野田東三郎　自適居士　岡田　乾兒　自然居士　大石　貞夫
自進居士　舟木重次郎　玄機居士　小西利右衛門　龍溪居士　大河原竹藏　自鐵居士　高田　直人
自徹居士　南　八郎　至心居士　南　良藏　全和居士　和田　清太　義勇居士　松田七男二
宗仁居士　灰原仁三郎　德隣居士　佐伯　武雄　自信居士　竹村　英昌　自夢居士　金子　卯吉
自照居士　島田　軍吉　無著居士　佐々木庄藏　自襄居士　木原　襄　心源居士　石井源次郎
自弘居士　南　弘　自房居士　中　房次郎　自盛居士　宮內　盛直　自進居士　前田　彌七
自彥居士　福田　次彥　自成居士　中目　成一　自宗居士　作道　宗作　自清居士　野坂喜代志
無二居士　飯村　稷山　心水居士　川上　十藏　自圭居士　安藤圭太郎　自然居士　岡谷長三郎
貫道居士　小出爲三郎　自泉居士　大橋　良平　自琢居士　竹澤　節藏
善利大姉　今小路利子　妙容大姉　竹內滿知子　妙操大姉　奥山嘉彌子　妙瀧大姉　高橋　瀧子
妙喜大姉　間瀨喜代子　妙念大姉　伊藤　直子　貞松大姉　守田治兵衛妻　貞操大姉　小松八重子
智勝大姉　町田　勝子　貞岑大姉　大森　岑尾　全貞大姉　補田　貞子　全敬大姉　杉田　敬子

惠純大姉　杉浦　絲子　全光大姉　畑　光子　全操大姉　鶏屋美代子　全咲大姉　井上　咲子
全眞大姉　櫻井　幸子　全操大姉　粮山せん子　妙艷大姉　小西　完子　智正大姉　山中　正子
妙操大姉　吉居てつ子

佐賀靈山會　（居士十四名、大姉四名）

無一居士　香川　輝　龍舟居士　豐增龍次郎　玄機居士　大中　正澄　賢性居士　林　孫四郎
永昌居士　牟田　善輔　無涯居士　村島　宏一　自德居士　中山　與一　自得居士　櫻井　吉丸
義徹居士　嬉野　遙章　汲江居士　竹下　清七　自徹居士　草場松次郎　宗國居士　坂本　經國
自得居士　山崎　佐六　天眞居士　吉原　政道　貞溫大姉　諸岡タマ子　妙操大姉　向井ハマ子
全操大姉　牟田イト子　妙珠大姉　諸岡　美子

伊丹拈華會　（居士四名、大姉三名）

晚松居士　山中善二郎　玄心居士　寺西幾久松　義靜居士　牛谷富太郎　良彥居士　岩田　稱吉
智禮大姉　白井　玉子　妙節大姉　齋藤ムラ子　全庸大姉　小西　庸子

西の宮無門會　（居士六名）

春艸居士　池尻卷之助　直得居士　田中　汎政　百谷居士　前田　認　白鏃居士　木下　益藏
深海居士　助野庄兵衛　能狂居士　田中泰太郎

西の宮巨鼇會　（居士三十九名、大姉五名）

自透居士　吉田　新義
自芳居士　山下芳太郎
自闊居士　後藤作次郎
自的居士　近松宇太郎
宗仁居士　田中　仁藏
自政居士　奥田政太郎
天然居士　横山　來
自清居士　長谷川清助
秀嚴居士　藤澤　嚴
萬安居士　梶谷萬太郎
妙增大姉　山田ます子
妙壽大姉　山田千代子

自徹居士　藤田彦三郎
自德居士　安永　德
巨海居士　井本爲三郎
自錐居士　吉村利三郎
自賢居士　蓬來　賢造
全直居士　上野　直吉
自元居士　横井元一郎
自久居士　廣井久兵衛
自憲居士　岡田　憲吉
自松居士　岡村松太郎
妙順大姉　澤田　順子

自廉居士　渡邊　廉治
自透居士　南　九郎
自徹居士　水野　正巳
自俊居士　助野　俊三
禪輝居士　和氣　輝太
自雄居士　松田　一雄
青巖居士　名田常右衛門
自耕居士　山田　春耕
無二居士　有吉不二男
勇猛居士　田中　好治
全富大姉　南　富野子

自鐵居士　木原德太郎
自勇居士　石上　勇
廓庵居士　田中　藤吉
全勇居士　前川　勇三
暉哉居士　喜田　新介
禪喜居士　平田喜一郎
宗壽居士　重成壽太郎
自鶴居士　鶴田　多八
宗活居士　八幡　四郎
妙操大姉　江見てつ子

東京雪山會〔接心會〕

（居士百十名、大姉三十名）

不識居士　楠田　謙義
貫一居士　森田萬兵衛
宗活居士　石川三男也

自辜居士　鈴木　常利
自逵居士　弘田　楠壽
自篤居士　福山　又一

自琢居士　有馬　才三
自闊居士　土屋　恭輔
一誠居士　畑　良太郎
自陶居士　勝部　眞太

自照居士　倉田　七郎
元得居士　藤岡　元惠
栽松居士　大石　正巳
自昌居士　兒玉　昌
自章居士　藤森　章雄
自昇居士　尾崎　利中
自安居士　鈴木　安一
自豐居士　高森豐次郎
自繼居士　平井　繼藏
宗仁居士　粂山仁三郎
自昇居士　山本　昇
自齊居士　粟野　齊節
自雄居士　松田　一雄
自雪居士　村井　二郎
自賢居士　島内　賢藏
自清居士　辻　清吉

擔雪居士　田中　茂
自省居士　山越　八郎
自精居士　秋山　精一
自喚居士　深井　虎藏
自剛居士　中野　正剛
自惺居士　菊地　晋二
自轉居士　根岸　轉
自春居士　米山春三郎
無聲居士　内田久次郎
自安居士　大倉庄兵衛
自槌居士　青木槌太郎
自覺居士　太田　熊藏
自秀居士　井上　清秀
禪忠居士　渡邊　忠夫
自精居士　千谷精一郎
曉影居士　岩田　匡彦

磊々居士　大宮　兵馬
自徹居士　石井萬次郎
自貫居士　高島平三郎
自放居士　三原　鼎
自清居士　倉光　清
自章居士　兒玉　章
自昭居士　小西　傳助
自勝居士　大橋　勝藏
自逢居士　大倉　庄吉
妙喜居士　伊藤喜代松
自貞居士　長尾　貞吉
自榮居士　藤井榮次郎
自誠居士　高橋誠一郎
關州居士　關　一
全和居士　柳澤和一郎
獲堂居士　大津　麟平
自道居士　吉田　道

自透居士　稻生鑑次郎
南海居士　岡本　通
自性居士　福島　〃作
自得居士　武田　徹源
滴翠居士　梅村般三郎
清山居士　山田清之助
自勝居士　大橋　勝藏
自逢居士　大倉　庄吉
妙喜居士　伊藤喜代松
自貞居士　長尾　貞吉
自榮居士　藤井榮次郎
自修居士　加島　修
自行居士　大畑　正行
自裕居士　山田　裕治
萬里居士　尾越　蕃輔
自道居士　吉田　道

自雄居士　藤村　雅雄
自澤居士　澤野多三郎
自覺居士　太田　熊藏
自秀居士　井上　清秀
禪忠居士　渡邊　忠夫
自精居士　千谷精一郎
曉影居士　岩田　匡彦
玄雪居士　江原　虎造

自保居士　安藤　保吉
樂善居士　入倉　善三
禪雄居士　水澤　將雄
自源居士　佐野源一郎
禪伊居士　吉村　伊藏
天民居士　伊藤　有隣
自東居士　赤羽　東司
自豐居士　富吉　豐吉
自廣居士　稻垣　廣晋
全操大姉　安田　淺子
全孝大姉　金子フミ子
妙壽大姉　增山八十子
全豊大姉　福島　豊子
全操大姉　大倉さみ子
全豐大姉　白石とよ子
妙壽大姉　金田コマ子

自林居士　小林七郎兵衛
全喜居士　西山　喜助
自明居士　有明　文吉
宗源居士　小出　源吉
自匠居士　川部　匠太
大來居士　美島　龍夫
自秀居士　松田　秀雄
全磨居士　外山　多磨
自正居士　中村　正一
全透大姉　鈴木　政子
妙光大姉　中川キヨ子
妙圓大姉　田中りう子
全節大姉　深井乙女子
全潮大姉　尾笥うしほ
妙保大姉　橋本　保子
全直大姉　丹澤ナホ子

自木居士　下村　義和
自京居士　村田京太郎
自耕居士　根岸　耕司
自芳居士　山本　芳
自正居士　廣岡　正次
自覺居士　鈴木　二郎
自保居士　林　嘉保雄
道源居士　大河原源五郎

全默大姉　中島トリ子
全昌大姉　南川シゲ子
妙華大姉　茂木はな子
全明大姉　平塚　明子
妙闕大姉　北川せき子
全明大姉　藤田ハナ子
全壽大姉　須崎きみ子

自活居士　小鹿　猪六
全卯居士　上田卯三郎
道一居士　本宮　一男
自貞居士　平石　貞市
無三居士　河原　三郎
自審居士　南　宗
自透居士　入倉彌一郎
自博居士　平石　博忠

妙大姉　福永サトヘ
妙壽大姉　關谷壽々子
妙節大姉　齋藤ムラ子
全菊大姉　岩岡きく子
全代大姉　大津千代子
慈泉大姉　内藤千代子
全竹大姉　竹越竹代子

全節大姉　平石　節子
妙誠大姉　小林　誠子

名古屋擔雪會

（居士四十四名、大姉二十三名）

自照居士　倉田　七郎
無崖居士　西川虎治郎
自邦居士　久米　邦滿
自龍居士　永井　以保
摘翠居士　落合　峻造
全秀居士　遠山　秀芳
無禪居士　水谷　清六
全說居士　渡邊爲次郎
自弘居士　山本　利弘
自彦居士　島澤　文彦
全良居士　藤澤鎌之助
全珠大姉　片野　玉子
妙琴大姉　武山　琴子

義道居士　藤澤　義道
全應居士　丹羽　應繼
柏樹居士　森　庄助
宗佐居士　吉田佐太郎
遂天居士　加藤鎌太郎
自仙居士　安藤仙太郎
善哉居士　門脇善三郎
自逢居士　平野紋三郎
楓蔭居士　伊藤　正
咄哉居士　佐々木善七
無一居士　田島　武一
全光大姉　倉田　光子
華溪大姉　森井　貞子

全哲居士　伊神　四郎
自覺居士　高木銀之助
全慶居士　伊藤慶太郎
宗順居士　加藤　順次
棟秀居士　前野善太郎
自孝居士　武山　保一
自久居士　本多久左衛門
自透居士　渡邊鎌次郎
自絲居士　船橋絲次郎
泰齡居士　田舍戸清兵衛
宗潤居士　瀧川　潤造
全壽大姉　倉田すゞ子
妙松大姉　松田まつ子

自鐵居士　伊藤　繁丸
自清居士　服部清次郎
全鈴居士　成田　鈴吉
自貫居士　梶田　義之
玄豐居士　奥田　豐
自性居士　山本　源太
自信居士　織田　信吉
全雄居士　落合　充雄
西信居士　石川勘之助
清淨居士　森田　清助
宗參居士　瀧川三千治
妙久大姉　武山ひさ子
妙二大姉　武山　春二

妙德大姉　渡邊とく子　閑雅大姉　坂崎　廣子　全玉大姉　荒川たま子　全里大姉　前田さと子
妙壽大姉　鬼頭すみ子　全智大姉　伊藤まち子　全直大姉　山田なほ子　妙英大姉　野口ミツ子
妙諦大姉　野口タカ子　妙房大姉　佐田フク子　全玉大姉　尾崎たま子　全貞大姉　菅井　貞子
妙信大姉　木村　信子　全惠大姉　林　末子　妙念大姉　野口マサ子

名古屋堪忍會（居士四名）

宗壽居士　伊藤喜太郎　禪鷹居士　西川　鷹次　自政居士　菅井　政治　自啓居士　尾崎　順啓

美濃無門會（居士十二名、大姉十二名）

讓保居士　兒島　宗講　涼光居士　坪井　伊助　自秀居士　坪井　秀　全蓼居士　松原　裕馬
全和居士　國枝　秀治　松藤居士　原　松藤　宗順居士　鳥本　順八　自蒜居士　森　恭造
宗梧居士　玉井　梧一　自保居士　竹中　保一　真心居士　竹中　恒七　秀英居士　貞光伊之助
妙清大姉　坪井せい子　妙芳大姉　坪井八重子　妙麗大姉　竹中　國子　全才大姉　竹中さい子
妙榮大姉　國枝染野子　妙馨大姉　國枝梅野子　妙信大姉　竹中のぶ子　祖兼大姉　竹中かね子
妙房大姉　竹中ふさ子　妙琴大姉　松原　琴子　全榮大姉　中川さかえ　全操大姉　森　ムラ子

大阪長風會（居士六十四名、大姉十名）

長風居士　中館長三郎　一機居士　高山　公通　自睡居士　後藤幾太郎　自得居士　布施　慶助
含翠居士　井島　岩太　自榮居士　奥田　重榮　自松居士　遠藤　道孝　自昇居士　櫻井昇三郎
自放居士　上田　解　自敏居士　山崎　敏男　自洋居士　中司文次郎　自介居士　福田介三郎
自平居士　松下　有孚　自然居士　植野繁太郎　自松居士　中館　松生　全和居士　保井　猶造
自新居士　村松新一郎　自幸居士　吉田　幸治　自康居士　西田　文治　自秀居士　内藤　確介
蘇關居士　橋本　浩　自正居士　中館正次郎　自安居士　安宅　彌吉　無三居士　藤田三重郎
自侃居士　高田　侃　自善居士　小川善太郎　自政居士　南條　政人　禪虎居士　淺間虎太郎
禪眞居士　藤井眞太郎　自禪居士　宮廻榮次郎　自啓居士　安原　啓次　全忠居士　大森　忠雄
禪育居士　春日　育造　自廣居士　山本　廣　禪忠居士　北條　實時　宋實居士　北風　丈介
萬丈居士　倉成　丈太　自成居士　牧野長太郎　自芳居士　岸本　芳吉　自辰居士　長明　辰藏
自晃居士　宮崎晃太郎　自恒居士　戸田　恒三　自健居士　白山　健三　自政居士　豊崎　政吉
自精居士　福田精一郎　了貫居士　長門谷貫之助　自泰居士　柴田　泰助　無三居士　阿波與三太
禪喜居士　杉山喜七郎　祖文居士　目黒文十郎　自省居士　佐野半次郎　自正居士　増田　正雄
自松居士　西村　吉松　禪猛居士　稻束　猛　禪定居士　田島　平吉　自得居士　小畠種次郎
自清居士　中田　清助　全義居士　古畑　義晴　全良居士　塚本　司良　自鈴居士　近藤鈴之助
道一居士　杉山　嘉一　瑞山居士　阿部　榮　義山居士　山本平三郎　自泰居士　山脇　泰治

全要大姉　中館やう子　妙久大姉　志岐　久子　全貞大姉　遠藤　貞子　全操大姉　荒木濱路子
智清大姉　安原　清子　全益大姉　柳本　益子　全和大姉　久留　和子　貞操大姉　戸田　操子
妙久大姉　清水ひさ子　全章大姉　郡　章子

神戸達磨會（居士三十一名、大姉四名）

無住居士　岩本廉次郎　全常居士　德廣　萬　自讓居士　丸屋　七郎　自榮居士　殿界　榮吉
自換居士　田村　又六　自熊居士　阪田　熊三　自直居士　高田　今吉　自適居士　有田卯三郎
自然居士　上野　可然　宗潤居士　井澤　潤　自永居士　永松　四郎　自昌居士　岩崎　昌
自新居士　加藤新太郎　一默居士　櫻井　義一　無三居士　山本　三郎　自彦居士　下田　彦人
自暢居士　小林　暢　自立居士　福田　立五　自晴居士　宮崎　晴吉　自常居士　龜井常三郎
自顯居士　信田　顯　自新居士　松田新太郎　自透居士　大野彦次郎　自鋼居士　橋寺鋼次郎
禪利居士　生西利三郎　自孝居士　柱　孝　自善居士　大平　善藏　自眞居士　森　眞
自愛居士　長谷部慶助　自大居士　鈴木　大吉　全喜居士　倉野喜太郎
全壽大姉　丸屋あい子　智光大姉　吉田むめ子　妙溫大姉　矢田たゞ子　妙松大姉　小林滿津子

伊勢萬年會（居士十七名、大姉一名）

自性居士　山本　源太　自繼居士　佐藤　爲繼　嘯哉居士　水谷　豐吉　自闢居士　金森　孫藏

自清居士　岡村　清一　自透居士　纖田　幾松　磊々居士　水谷　百碩　自達居士　安達松次郎
自覺居士　伊藤覺右衛門　自得居士　小河内彌兵衛　一週居士　山中治三郎　壽仙居士　松枝　善平
自彊居士　水谷清太郎　自成居士　佐藤金三郎　自安居士　佐藤金五郎　自良居士　松下兵次郎
獨峰居士　漆崎　精一
全龍大姉　駒木根りう子

半田微笑會（居士十三名、大姉四名）

秀巖居士　神田　巖　自篤居士　小栗　篤平　貫道居士　小出重太郎　儉養居士　中島　養吉
自然居士　竹内　孫平　快道居士　小栗　平藏　自夢居士　小栗鶴之助　自誠居士　内田　政三
全忠居士　内田　忠平　自達居士　加藤新三郎　自硬居士　伊藤　硬一　自彰居士　永田　彰
全喜居士　都築喜之助
全錠大姉　都築　錠子　全操大姉　小栗美登子　全恒大姉　榊原　恒子　全壽大姉　榊原百合子

丹波禪風會（居士三名）

自卓居士　清水　卓造　宗源居士　齋藤源次郎　自保居士　島根　保

秋田維摩會（居士四名）

自然居士　猶崎　潤造　禪祐居士　池田祐之助　禪喜居士　村井定之助　嘯哉居士　木元吾三郎

野田茂木家接心會（居士四名、大姉七名）

禪龜居士　茂木佐平治　宗鶴居士　茂木　熊藏　宗樹居士　茂木　林司　自幸居士　角田　幸吉
妙壽大姉　大坪　政子　祖梅大姉　鈴木　梅子　妙華大姉　茂木　花子　自關大姉　北川　關子
全明大姉　藤田　花子　全悅大姉　内田　悅子　妙光大姉　茂木　愛子

紀州南家接心會（居士十九名）

孤松居士　西松右衞門　有隣居士　小原　友藏　自德居士　南　德太郎　自松居士　前田　德松
自長居士　西　長太郎　自耕居士　新田　吉藏　自楠居士　楠本　音吉　宗俊居士　玉井俊次郎
自松居士　前田　豐松　無一居士　前田　唯一　自得居士　玉井德一郎　禪真居士　岩本　真一
禪大居士　雨部太一郎　自與居士　太橋與一郎　禪和居士　和田嘉四郎　自傳居士　奥平　傳藏
自光居士　前田光之助　自藤居士　藤田熊次郎　全虎居士　前田　虎吉

一七七　關山一派の宗風の存する處〔遠諱と入定　其一〕

開山無因禪師――自己より道心を發露――願心が願心ぢや――授翁の心印を得る――妙心寺の三世――行事禮樂は度外――「惠眼の這裏に生死無し」――パチ〳〵して居る――花園天皇の御宸翰――妙心の規矩を定む――退藏院と瑞泉寺

海清寺の開山は無因禪師ぢやと云ふことは前にも云ふたが、此の開山も自己より道心を發露し

たるお方ぢや。でも坊主ぢやない。尾州に產れて、其の裔祖は平民ぢや、九歲で父の許可を得て、父と共に京都に登り、建仁寺内の天潤庵で可翁和尙に就いて得度した。中々願心が願心ぢやから修行も熱心ぢやつた。ソコデ可翁和尙が「別峰相見」の話を示して、是れが透らにや駄目ぢやと云はれたので、開山は參禪入室を怠らず宗旨を究められた。其の他にも教相も遣れば、詩文なぞも中々手に入つたものぢやつた。そればかりぢやない、周易にも通ぜられた。

開山が三十五歲の時サ、良師に就いて其の蘊奧を盡さんと、妙心寺第二世授翁宗弼禪師の俊烈なる紺鎚の風を慕つて、東山から花園へ通參した。それが四年の間一日も缺さず、刻苦勉勵されたがサ、三十九の歲ぢやつた、建仁では後版に轉位させると云ふ評判があるので、開山は、今そんなことになつては、折角の修行が中途半端になつて、辨道の機を失して仕舞ふと、俄かに建仁を起つて花園に移り、授翁の會下に錫を留めて、專一に修道されたので、遂に授翁の心印を得たぢや。其の印證は前にあるから就いて見るが好い。ソレデ授翁の後を襲ふて妙心寺三世に出世されたのぢや。

全體妙心寺の御開山關山國師の平素接衆の活作用は、他の五山なぞとは違ふて、行事禮樂は總べて度外せられた。それが關山一派の宗風の存する處ぢや。關山が箒を以てサ、

「惠眼（關山の諱名）の這裏には生死なし。」

と、雲衲を逐ひ出した機鋒の鋭さ、實にはやバチ〳〵してをる。僧堂内に居眠り半分の衲子を警策で打つやうな死禪者ぢやない。ソレデ、花園天皇の御宸翰にも、

「仍而一流再興、妙心寺造營以下の事、仙洞に申置く仔細有り。」

と仰せられたぢや。此の一流とは關山の一流ぢや、無相の一流ぢや。關山的孫の無因禪師は、此の宗風を擧揚するのに苦心して、遂に妙心一流の規矩を定められた。

此の海清寺は應永三年に開山の建立ぢや。妙心四世の日峰宗舜禪師は此寺で打出されたぢや。無因禪師は此の他に波多野出雲守（無因の參徒）の建立した妙心寺内の退藏院と、日峰の建てた備州犬山の瑞泉寺とに開山となられた。又た河内の觀音寺、山城の圓福寺にも請ぜられ、終りに三止四請に依つて大德へ出ることになつて、遂に遷化された。丁度應永十七年庚寅六月四日ぢやつた。世壽は八十五ぢやから、マア〳〵長壽ぢや。其の開山の五百遠諱は明治四十二年に相當するが、諸堂の營繕と、今一つは衲の入定式を共に遣りたいので、とう〳〵今年まで延したぢや。

一七八　とても大會の人を容れられぬ　〔遠諱と入定　其二〕

大會が近付いた――衲が居士大姉は世界中――安宅さんが書院を建てゝくれた――假の隱寮へ引越し――町の風呂屋を一軒專用――町内は國旗に提灯でお祭り騷ぎ――人間ぢや熱も出やうし冷もする――大袈裟な新聞の報道――押掛けた見舞の客に閉口

サー愈々大會も近付いた。寺の方では夫々役位が極つて、マア圓福、建仁、祥福から各々五十名宛の雲衲が集つて、此の人等が常住で遣つてくれるので安心なものぢや。併しサ、法會係は忙しいぢや。前にも云ふたが衲の居士は世界中に廣がつて居るからサ、それに一々案内するとなると、宿處が變つたの何んのと、中々手數なものサ。兎に角境内は廣いが、とても大會の人を容れることが出來ぬ。安宅彌吉さんが書院は建てゝくれたが、管長や師家等だけすらも入らぬ。ソコデ衲は門前の喜田清左衛門の座敷を假の隱寮として引越し、海清寺は退藏院の閑栖が假住ぢや。それから第一禪堂には如意寺を充て、第二禪堂には茂松庵を充てた。第一は全國僧堂から一粒撰りにして五名宛拜請した生粹の龍象ぢや。それが百八十人ばかりちや。又た第二は女僧衆と南天棒下の居士大姉ぢや。併し浴室は間に合はぬので、町の風呂屋を一軒專用にした。此の位ぢやから町内は國旗に提灯と、まるでお祭りぢや。それに坊主頭が三百五十もウヨ〳〵して居るのぢやから、マア〳〵西の宮始つて以來の騷ぎぢやらう。

處が三月二十日頃になつて、衲は風邪の加減サ、少々熱があつた。大會の前ぢやと云ふので、侍者も、圓福、建仁、祥福の評席等も心配したぢや。併し衲は、是ればかりの病氣は病氣とは思はぬ、平氣なものサ。役位等に向つて、

「ソリャ人間ぢや。熱も出やうし、冷もするぢや。こんな熱が五百遠諱の邪魔になるやうなとはない。まだ二升位の酒は朝食前の茶の子ぢや。心配するな〳〵。」

と云ひ渡したが、大阪あたりの新聞が大袈裟に報道したものぢやから、見舞の客の押掛けて來たのには、病氣の方よりも餘つ程閉口したよ。

一七九　老僧八十氣峻嶮〔遠諱と入定　其三〕

萬壽寺が先頭——二十一僧堂の到着——二十五日には掛籍拜見——五尺に長さ三間——支那にも天竺にもない——廿六日は會中の祈禱——祈禱の偈——各師家の來山——宗演和尚の支那少林寺參拜談——「臨濟錄」の開講——ワン〳〵激勵——海清寺の本堂が搖れた

三月の二十四日には大分萬壽寺の僧堂衆が第一先頭で、それから堺の南宗、京都の南禪、妙心、博多の聖福、江州の永源、鎌倉の圓覺、久留米の梅林、京都の東福、名古屋の德源、美濃の瑞龍、

正眼、甲州の惠林、鎌倉の建長、京都嵯峨の天龍、美濃の虎溪、京都北野の大德、相國、武州の平林、安藝の佛通、伊萬里の圓通の二十一僧堂の大衆が到着した。皆な是れ天下の衲僧ぢや。

二十五日にはサ、掛籍拜見ぢや。皆な驚いたのは此の掛籍ぢや。幅五尺に長さ三間からある。掛籍と云ふは此の會に集つた人の名刺ぢや。雲水ばかりぢやない、居士大姉まであるから大層なものぢや。こんな掛籍は日本は愚か、支那にも天竺にもないぢや。黃梅七百の高僧と云ふがサ、それにしても是れだけの掛籍は要らぬわ。掛籍と隱寮の風呂の大きいのは一番ぢや。それから其の晩は安單ぢや。

二十六日は先づ第一に會中の祈禱をやつた。眞讀ぢや。一人が一卷若しくは二卷讀めば、六百卷を讀み終るから、人數の多いのは仕合せなものぢや。衲が祈禱の偈は斯うぢや。

「絕海の妖雲天地昏し、何人か隻手にして中原を定む。一條吾に南天棒有り。魔軍を催伏して聖恩に報ふ。」

と遣つて退けて祈禱が濟んだ。京都からは左邊亭默雷、耕雲室龍淵、槐安軒獨山、南針軒霧海、偏前から傳衣室全提、神戸からは碧層軒愚溪の各師家が見えられ、そこへ丁度鎌倉から楞伽窟宗演が來られたので、幸ひぢやからと云ふので、四來の雲衲の爲めに支那少林寺參拜談を請ふて、

雲衲の行脚を鼓吹して貰ふた。

それからサ、衲が「臨濟錄」の開講ぢや。

「寶劍未だ揮はず四海淸し、老僧八十氣崢嶸。三頓を將つて君が爲めに喫せんと擬す、手裡の南天躍つて聲有り。」

サー天下の雲衲方、衲の提唱を聞くが好いと、ウン〳〵激勵したぢや。一喝が餘り大きかつたので、海淸寺の本堂が搖れた、お負けに入齒が拔けて仕舞ふたわい。夜分は入室喚鐘で賑やかぢやつた。

一八〇　末後も矢ツ張り大騷ぎ〔遠諱と入定　其四〕

西宮全町の托鉢――頭陀行は中々出來ぬ――油斷のならぬはお手元拜見――腹の底を探るのと少しも變らぬ――昔に返つて面白かつた――長蛇の樣に全町を――大將方が綺羅星の如く――能うマアあれ丈の人が――八十年間天下を騷して來た衲は大會に大施餓鬼とか大般若とか云ふことは止めて、大衆に援心させたいと思ふたが、それからそれへと施主が願ひ込むので、大分大衆方にもお經の方へ骨を折らせたぢや。

それから此の大會中にサ、雲衲が揃つて西の宮全町の托鉢をやつた。是れは別段金錢や米穀を

貰ひたいと云ふのぢない。西の宮の人間の精神を見るためぢや。徒に信施を貪る僞坊主には一寸味へぬぢや。頭陀行と云ふことは中々出來ぬ。四方から集つた大衆方もサ、開山に報恩と共に、衲が五十年來の爲人度生に隨喜せられたのぢや。併し油斷のならぬはお手元拜見ぢや。總參で衲の室內を覗ふばかりかサ、西の宮を分衞して、其の信不及の有か無かを見やうとする。油斷も隙も有つたものぢやない。

今では托鉢なぞは無くなつてサ、托鉢でもする者は乞食ぢやと云ふことに極つて仕舞ふたが、實は托鉢位、其の土地々々の人心の底の底まで見えるものはない。ぢやから西の宮町の連鉢も、四來の大衆が衲の腹の底を見やうとするのと少しも變らぬ。ソコデ衲も密と隱寮を拔出て、朝の五時から雲衲と同じやうな扮裝で分衞に出掛けた。實にハヤ五六十年前の昔に返つて面白かつた。居士でも隨つて來た者があつて、實に長蛇の如く全町を巡つた。町の者等は、衲が其の中に在ることを知つて、一々雲水の顏を笠の下から覗くには、一同が驚いたと云ふことぢや。

サテ四月三日の宿忌の晩、在家で云へばお逮夜ぢや。其の晩には、建仁、東福、大德、相國、天龍、佛通、南禪、圓覺、建長、國泰、永源の各管長、それに圓福や祥福、妙心、德源、聖福、高源の各師家と、天龍の前管長の息耕軒が來てくれた。又た當日には向嶽管長と黃檗の管長代理

も見えて、我が禪界の大將が、綺羅星の如く集つたのは盛觀ぢやつた。

愈々當日ぢや、上天氣サ。本山からは一山總出頭ぢや。そして教務本所の役位も皆な喜せられた。衲が一代の末後の大會ぢや。宗匠等が十九名かサ、それに和尙や大和尙等が百五十名、各派の坊樣や來賓が二百五十名、雲水は堂内と常住とで二百八十名、其の他居士大姉は數へ切れぬ。能うマアあれだけの人が海清寺へ集つたと思ふぢや。おまけに天童が出て、惠比壽神社の前から練り込むぢや。四月四日の西の宮の天地は割れ返るやうな騷ぎぢや。衲も是れ、ギャッと唐津に初聲を揚げて以來、八十年間天下を騷して來た南天棒ぢやから、末後も矢ッ張り大騷ぎぢや。

ソコで法要はサ、出班燒香と云ふて、我が宗の一番大切な禮法で遣つたぢや。其の時の拈香の偈は斯うぢや。

「神光を滅却して定慧圓かなり、巨鼇背上單傳を失す。靑山雨過ぎて春錦の如し、杜宇冤に鳴く五百年。

別別

一輪の新月前川に滿つ。」

と。永年目論んだ開山の遠諱は、斯うして盛大に營み終つた。是れから入定ぢや。

一八一　一應化度を改める爲めに入定〔遠諱と入定其五〕

誓つた八十と云ふ齡――生き葬禮――死ぬる時がないから――白木の位牌――棺の中へ入つた――棺中で獨酌五合――又た別境界――色衣紋白でノコ〳〵――衲の知音は稀れぢや――是れから眞の趙州――衲が自慢の七つ――出來たらお眼に掛らぬ――信ずれば南天棒も佛なり

衲の入定は範を示したぢや。藤田彦三郎さんや齋藤幾太さんの骨折で出來た瓶棺は、楠の外椁に入れて、山門の下へ備へ付けて置いた。そこは白の布と鯨幕とが張つてあつたので、朝から人々が詰掛けてサ、衲の棺入りを見やうと云ふのぢや。境内は人の山を築いたよ。

衲は開山の法要が濟むと、先づ第一に誓つた八十と云ふ歳で、一應化度を改める爲めに入定の法を示した。卽ち生き葬禮ぢや。葬禮は生きてをる中に限るぢや。衲は何時も生きて居る。死ぬる時がないから葬禮もやつたぢや。「再住妙心五百八十三世鄧州全忠和尙大禪師」と書いた一本の白木の位牌は棺の前へ立てられた。それには供物も何もチャンと備へてある。右側には各僧堂の師家方に第一禪堂の大衆・法類や舊隨寺院。又た左側には各派の管長、隨喜寺院に第二禪堂の尼衆、居士大姉連中が並んで居る。四方は參詣者で爪も立たぬ。其の中を衲は白衣でサ、杖拂、印

籠、鉢盂、講本、竹篦等を夫々の小師に持たせて棺前に進み、先づ南天の拄杖を拈じてサ、

「拈じ來り弄し去る南天棒、雷霆を叱咤す八十年。今日分明に遷化す、樓花舊に依る法窟の前。別別」

柳樑横に擔つて人を顧みず、直に千峰萬巒に入り去る。喝。」

と、一喝を吐いて棺の中へ入つて、上から蓋をする。併し警察が喧しいので蓋は取つたがサ、中は全く寂かぢやつた。衲は坐をして居つたが、やがて腰に付けた瓢を取出して、棺中で獨酌五合を極め込んだ。愉快は又た別境界ぢやよ。外では今ま「舍利文」を讀んでをる、それから建仁の默雷さんが先頭で、それ〴〵皆な燒香が終つた時、衲は棺中で白衣の涅槃服を脱き捨て、色衣、紋白の袈裟でノコノ〳〵と棺を出て、

「自ら瓶を携へて去つて村酒を沽ひ、却り來つて衫を著て主人と爲る。」

とやつて、サツサと引上げた。是れ實に「衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成」ぢや、衲の知音は稀れぢや、印可の中で一二の他は、衲の此の境界を知る者はないぢや。サー是れから眞の趙州と出掛けるぞ。

終りに引ツ括めて、衲が七つの自慢と云ふを云ふて聞かさう。

一、釋迦は七十九ぢやつたが衲は八十餘歳と云ふこと。

一、南天棒を提げて二十五の道場を前後二回廻つたこと。

一、達磨以來宗匠の檢定法を提唱したこと。

一、居士大姉三千人の會下を有すること。

一、墨蹟十萬枚から書いたこと。

一、ペロリ五升飲んでも酒に呑まれた事のないこと。

一、天下の宗匠雲衲の面前で生前に入定轉錫を行つたこと。

是れが衲の自慢ぢや。衲に鼻を高くさせまいと思ふ人はサ、誰れでも遣つて御覽じろ。出來たらお目に掛らぬ。一寸やれぬぞ。サーやれ〳〵。

長いこと惡口を聞いた、八十年までの行脚は是れだけぢや。八十一からのことは再來南天でお目に掛りませう。衲の鼻を折るまでに奮勵して、斯道のために盡されたい。穴賢々々。

信ずれば南天棒も佛なり

三世の諸佛も皆な南天棒

南天棒行脚錄 終

大正十年四月十五日印刷
大正十年四月二十日發行

南天棒行脚錄
定價金貳圓八拾錢

著者　中原鄧州
校正者　平松亮卿
發行者　濱井松之助
東京市日本橋區數寄屋町一番地
印刷者　宮田龜六
東京市神田區西小川町二丁目六番地
大成社印刷

不許複製
著者
檢印

發兌
東京市日本橋區數寄屋町一番地
大阪屋號書店
電話本局三七三七番
電話本局四二八九番
振替東京一三七五番

南天棒老師著

天覽

提唱碧巖集

〔上卷〕金四圓五拾錢
〔中卷〕金五圓
〔下卷〕金五圓五拾錢
送料各册金廿壹錢

天覽

提唱臨濟錄

菊判總布裝函入
定價金三圓八拾錢
郵送料金十五錢

三版

一喝禪

四六判總布函入
定價金壹圓參拾錢
郵送料金拾貳錢

發兌　東京振替日本橋數寄屋町一三七五番　大阪屋號

392
189

終